

座船と云こと見へたり、これ一番御座船と呼者也、又御召舟と云、海舟には早舟を用今關船と稱す、大船を御召御座船と云、次を御召替舟と云、若川の瀬あつく御召の船とをらざる時、召替の舟にて通すなり、いわゆる船に乗こと、馬に乗がごとくすといへり、海陸舟馬ひとしうす、或は大御座船、中御座船、小御座船と呼、後太平記に、先帝の御座船といへる、帝王及諸侯、太夫士、貴人の乗りたまへるゆへ、御座と云、御召舟と云也、船を入置覆のやを御船宮と云、攝州川口御船やに有之、御公儀様、御川御座船、以前紀州より御獻上の舟なるよし、紀伊國丸と號す、眞舳に孔雀を彫物にす、故に孔雀丸と稱す、土佐丸、中土佐丸、難波丸、みな金銀珠玉をちりばめ、美つくせり、其結構言語にのべがたし、其外御大名様方御召船、數多にして、其美筆紙につくしがたし、或は龍を滅金の金物にして、艦にゑがき、雲水奇花をかざりとし、舳に蟠龍飛龍を刻めり、是いわゆる龍舟也、○中凡川御座船、其制新古の違あり、又屋形の製造數種有、すべて中倉を屋形とす、此を上段と云、其後を次之間と云、其後倉を舳屋ねと云、總矢倉也、其後に有を出しやねと云、上に太鼓樓有、上段の前倉を將凡と云、其前に有を表出しやねと云、此下に座有を小將凡と云、左右に有やねを旅やねと云、取置也、天子の御舟は、茅萱葺にて千木、鯉木を上る、將軍家は、檜皮葺にて、玄やちほこあり、其外皆とち葺にて箱棟、鬼板あり、唐破風、てり破風、むくり破風、或は入母屋作、横棟造、上屋形あり、又左右の高欄、胴舟梁まであるを常とす、舳まで通す者、反臺袖垣あり、

〔永享九年十月二十一日行幸記〕一入夜三の有御舟、主上○後園御引直衣にて、寢殿の南の庇、東向の

妻戸より出御○中略御座船有屋形、上に鳳凰二有、兩方舳さきに玉あり、臺にすまたに水引有、色紅

和歌の御舟也、主上○中略がくを被遊、御笙也、○中略龍頭の船、水引詩の舟也、○中略鷓首船、水引管絃舟也、

〔毛利家記二〕上様○吉中略御誕ニテ、秀元ハ則御宿へ歸ラセ給ヒ、急出船マシ、小倉ヲ半里程

出給ヒ、跡ヲ見給へ、船一艘見ベシ、定テ御座舟ニテ有ベキゾ、何トゾシテ御先ニ關へ著セ給フ